

2004年夏休み友情のレポーター ラオス取材レポート

横原 泉（静岡県 / 当時 14 歳）

飛行機から見た空。

初めての飛行機に初めての海外。

空港を出ると日本に似た風景が広がっていた。電車から見ると少し離れた所には高層ビルが立ち並んでいるのに、目の前にはくずれそうな家が並んでいる。

さびしい気持ちになった。

ノンカーイ駅に到着

ラオスへ入国。

太陽がキラキラしていて、とても暑い。電車が予定を遅れていたため通訳のブライアンさんが3時間も待っていてくれた。日本でこんなに待ってくれる人は“まずいないな”と少し驚いた。日本と違って時間がゆっくり過ぎていくようだった。

友情のレポーターに決まった時うれしかったのだけれど少し困っている自分がいた。

英語だって苦手だしラオス語なんて知らない。自分から友達を作るタイプでもない。でも今、心から友情のレポーターになれてよかったなと思っている。壁があったからこそ、その壁を乗り越えようとがんばれたのだと思う。

今日は5：00に起きて、托鉢を見た。

まだ少し暗い中に遠くの方からオレンジの服を着たお坊さんの姿が見えてきた。その風景がきれいだった。

午後は、パイ君とバンデット君とサンコーン君とセーン君、コンケル君と一緒に王宮博物館を見て、そのあと滝に行った。

滝ではみんなビチョビチョになって遊んだ。とってもとっても楽しかった。言葉は分からなくても、なんとなく相手のことが理解できて、心が通じた気がしたのがうれしかった。

友達になれた気がした。

インタビューで「一番楽しい事は何？」

と聞いたら、「勉強」という返事がかえってきた。私は親に言われてやる事が多いから少しはずかしくなった。

学校の先生へのインタビューが終わるとサンコーン君とセーン君とコンケル君が待っていてくれた。ラオスの地図でルアンパバーンの場所を教えてもらったり日本語とラオス語を教えあったりした。あっという間だった。初めて会ったのが数日前なのに、それを感じないのがうれしかった。

ワット・シェントーンで見つけた占い??

セーン君に見てもらおうと苦笑い……。

そのあと「Good!」って行ってくれたけれど……

お坊さんになったら

お坊さんの1日

4 : 0 0

お祈り

5 : 0 0

托鉢 朝・夜の2回30分~1時間ほど行われる。ごはんは蒸して作られる。

6 : 0 0 食事

自分の住むお寺のまわりを行列になって1時間ほど歩きそこに住む人々から

6 : 3 0 ごはんをもらう。

8 : 0 0 学校

お坊さんは皆仏教学校へ通っている。

11 : 0 0

食事 昼食は朝の托鉢でもらったものを食べる。夜食は宗教上食べない。

1 : 0 0

学校

4 : 3 0

7 : 0 0 お祈り

仏教学校

Q: 仏教学校って何?

A: お寺に暮らすお坊さんが行く学校のことです。

Q: どんなことを教えているの?

A: ふつうの学校と同じ内容^{プラス} + 仏教に関すること。

Q: 人数はどのくらいなの?

A: 生徒が528人 先生が44人です。

Q： 学校へ行く日は？

A： 月曜～金曜の毎日で、昼食はお寺に戻って食べます。

Q： 学校で困っていることはあるの？

A： 建物が狭い上に扇風機もなく暗い。

希望者が大勢いるが住む場所も足りなくなって来ている。

不足している物・・・本 扇風機 パソコン

お坊さんになったら

プラス

衣食住が手に入る

貧しい子でも学校に行けて勉強が出来る

マイナス

遊んだり運動してはいけない

家族に一年に一度しか会えない

きまりが厳しい。

お坊さんの部屋

修行中のお坊さん

6人一部屋 ベッド・机・服のハンガー・ホワイトボード

修行が終わったお坊さんの部屋

3人一部屋 ベッド・扇風機・ほうき・本、ノート、歌のカセットテープ、ラジカセ

2004年 夏休み友情のレポーター 横原 泉

2004年夏休み友情のレポーター ラオス取材レポート

香山 和志（東京都 / 当時 14 歳）

はじめに・・・ [ラオスの紹介]

国名 : ラオス人民民主共和国
面積 : 24 万km² （日本は 37 万km²）
人口 : 537 万 7,000 人
宗教 : 仏教徒が大半を占める
言語 : 公用語はラオス語
通貨 : キープ 1 円 = 90 キープ位

友情のレポーター ラオス取材

1 日目 [行動]

成田空港

6 時間 飛行機

タイ・バンコク空港

1 時間 タイ国鉄

ホアランボーン

寝台列車

ノーンカーイ へ

（タイとラオスの国境の町）

タイ到着

生涯 2 回目の飛行機に乗って午前 11 : 00 に成田を出発しました。そして現地時間の 15 : 30（日本時間 17 : 30）にようやくタイに到着。

バンコクの駅

まず最初に僕たちは、タイのホアランボーンという所に行くために電車に乗ることになりました。そして日本では考えられない事をたくさん発見しました。1 つ目は線路とホームとの段差が 30 cm もないこと。2 つ目は上りと下りの間にあるフェンスは電車が来ない時は普通にあって、電車が来た時だけ駅員が手動で閉める。とて

も危険な場所です。

ホアランボーン駅

ここはバンコクの駅とは全く違い大きくてとてもきれいな場所でした。列車に乗っている途中もバンコクという町を見てきましたが、ビルなどの建物は、ほぼ東京と変わりませんでした。しかしまだ整備が足りていないのか川は汚く車から出る排気ガスも日本より黒いのです。きれいな緑のあるタイの国がどんどん壊れていっているようでした。

初・寝台列車

生まれて初めて寝台列車に乗りました。予想ではずっと揺れているので落ち着かないだろうと思っていましたが、全く反対で外の景色を見ながら寝ていると、揺れが逆に気持ちよくなり、すぐに寝てしまいました。

2日目 [行動]

ノーンカーイ駅

トゥクトゥク

友好橋

バス

ラオス入国

トゥクトゥク

ビエンチャン

ラオス入国 !!

遂に目的地ラオスに到着した。友好橋から見たメコン川はとても大きくきれいだった。

そしてこの国でもビックリな事が・・・ナント普通に街の中で牛が歩いているのだ。かなりビックリ!!

ブライアン

ラオスに入国してすぐの所にとってもテンションの高いラオスの人がいた。その人がブライアンだ。ブライアンは今回僕たちの通訳として同行してくれるのだ。ブライアンはまだ若いのに英語がベラベラだ。大学生と言っていた。これからの取材にとっても力強い仲間ができた気がした。

貧困

ビエンチャンに着いて昼食を食べていると子どもや女の人が僕たちや他の白人さ

んに声をかけてきた。その人たちは手を合わせておがんだり、手を出したりして、まるで「金をくれ」と言っているようだった。この旅で初めてこういう状況になった僕はショックだった。本で読んでいてある程度覚悟していたつもりだったが、いざそうになると声も出なくなった。こういう人達が世界にいるのに何もできない、自分への情けなさに腹が立った。

3 日目

[行動]

ビエンチャン

10 時間 バス

ルアンプラバン (ワット・シェントーン)
(ナイトマーケット)

地 獄

ビエンチャンからルアンプラバンまでバスで約 10 時間・・・まさに地獄。バスのなかはとても狭く、とても寒い最悪のコンディション。景色はすごくきれいで、あまりに広大すぎて何時間経っても変わらない。(森とか山ばかり)

小さな友情？

ビエンチャンからルアンプラバンまでの 10 時間のバスの中で、僕たちの後ろの席に 3 人の小さい子どもとお父さん、お母さんがいた。その子達はとてもかわいくて、僕たちが笑いかけると、ちゃんと笑ってくれた。そして末っ子の子はまだ言葉が話せないらしく、バスがクラクションを鳴らすたびに「ブー」と言っていた。

ラオスの事情

バスの昼休憩は 1 回しかない。しかもちゃんとしたトイレがあるのもそこだけ。その他は、トイレ休憩はあるがたいていは草むらの中。それが運転手に「トイレに行きたい」と言うと手頃な草むらで止まってくれる。

ルアンプラバン

この街には犬と猫が多い。特に犬が多く、別に飼われているわけではないので、あちこちから飛び出してくる。家やお店のなかにも入っていくが、ラオスの人は心が広いので、入ってきて追いつくような事は全くない。それに首輪はついていても、つながれている犬は一匹もいなかった。

ワット・シェントーン

僕たちがルアンプラバンの街を歩いていると急に雨が降りだしてきたので、急いで

近くのお寺の中に入りました。そこが「ワット・シェントーン」というお寺だった。このお寺はルアンプラバンで最も有名なお寺らしい。「シェントーン」という名前の意味は「シェン」が泊まる所がなく短期間寺に滞在している人のことで、「トーン」は金^{きん}という意味らしい。中にはたくさんの仏像があり天井や壁には色々な模様が描いてあった。日本のお寺よりも派手で金を多く使っているなァーと感じた。しばらくするとお坊さんたちがお堂の中に入って来た。そしてお経のようなものを読み始めた。僕たちにはさっぱり分からなかった。けれどお坊さんたちは皆、真剣にお経を読んでいた。

メコン川

メコン川を初めて見た時のイメージは「湖」みたいな感じだった。日本の川は、急で流れが強いので、ラオスの滝と同じ位だと思う。逆にメコン川はものすごくゆっくりで、多分逆に泳いでも、そんなに大変ではないと思う。それにメコン川はなんといってもラオス人の生活の一部である。工場や大きなビルが少ないラオスでは、庶民にとって観光客相手の商売が最も重要である。だから客寄せになるメコン川は、ラオスの観光客相手に商売をする人々にとってかなり大事である。

初取材

お坊さんがお経を読み終わった後一人のお坊さんに話を聞く事になった。僕たちは初めての取材だったので、とても緊張した。一緒に日本から来ていたドミニクさんがどんどん質問している中、僕は聞きたい事はあったのに、それが上手く言葉にならなかつたり、言うのを惜しんでしまって何も聞けなかった。

そのお坊さんの名前はソニー君という。歳は11歳で、この寺には1年前からいるらしい。

将来は本物のお坊さんになりたいらしい。そのために今は一生懸命勉強しているのだという。本当はスポーツをしたいのだがお坊さんはスポーツをしてはいけないので今は我慢している。

ソニー君の話を聞いていると、僕たち日本人にはとても考えられない事が多かった。まず、スポーツや遊びが出来ないという事、日本の子供たちが楽しみにしている事のランキングの上位に入るであろう二つである。これができなくては必ずストレスが溜まっていくだろう。それに勉強が好きというのも日本の子供からすれば「えー！」である。

それでもお坊さんになりたいというソニー君が理解できなかった。

ナイトマーケット

ナイトマーケットのほとんどのお店で売られているものは織物や布だった。こういうものが、ラオスの定番のお土産らしい。お店の人は皆売るのにとっても一生懸命だっ

た。通る人、通る人に声をかけていた。

4 日目

[行動]

パバーン寺

ワット・ムーンナーソンプーアラム

4 人のお坊さんに取材

プーシー

パバーン寺

ここには大きな金色のお寺が建っていました。中に入ると一面に仏様に関する絵が描いてありました。特に印象的だったのは仏様が悪い事をした人に罰を与えている絵でした。

熱湯の中にその人達を入れて殺していました。他にも剣で刺す絵もありました。その絵を見ていると少し仏様に嫌なイメージを抱きました。

ワット・ムーンナー ソンプーアラム

主にこのお寺の 5 人のお坊さんにインタビューをした。

5 人のお坊さんの紹介

名前	年齢	
コンケル	20 歳	プロのお坊さん
セーン	16 歳	すごく勉強熱心
サンコーン	14 歳	頭が良い、でも音楽も好き
パイ	12 歳	いつも笑っている
バンディッド	12 歳	恥ずかしがり

お坊さんに取材

まず最初に名前や歳などを聞いた。そして質問をしていった。その中で一番驚いたのは、お寺での一番の楽しみは勉強、そしてつらい事は「ない」という答えでした。お寺での 1 日は結構きつく、とてもじゃないけどつらい事がないような生活ではありませんでした。それでもそう答えるお坊さんたちの精神力はすごいなあーと思いました。

(ちなみにこの質問には 5 人のお坊さん全てが同じ回答でした)

その後ちょっとしたゲームをした。ゲームといっても遊びではなく、自分にとっ

が一番大切なこと（物）を一つ書くというのだった。するとこういう結果になった。

僕	家族	一番近くにいるから
いずみ	友達	相談できるから
コンケル	家族	
セーン	勉強	必ず役に立つから
バンディッド	家族	恥ずかしがっていた
パイ	家族	恥ずかしがっていた

こういう結果になった事を僕はすごく嬉しく思った。予想では「仏様」って書くの
かなあとおもっていたので、「

「家族」と書いてくれたのは意外だった。でもこういう思いとか考えは国が違っても
かわらないのだなあーと思った。

その後にコンケル君とセーン君にビデオの使い方を教えてお寺の中を紹介してもら
った。食事をすると、セーン君の部屋、コンケル君の部屋の順に案内してもら
った。英語はわからないけどなんとなく言いたい事は分かったような気がした。

プーシー

頂上まで行くのに300段以上もある。登るのは本当にきつかった。汗をダラダラ
かきながら頂上に行った。でも頂上からの景色は最高だった。そして一つ気付いた事
が・・・

なんてお坊さんがたくさんいるのだろう！！

それだけなら驚かないが、そのほとんどのお坊さんたちは外国人の観光客と話してい
ます。

多分、プーシーについてとかを話しているんだと思う。そういえば街でもお坊さんと
外国人が話しているのを結構見かけた。

だからルアン普拉バンのお坊さんたちは英語が上手いんだと思った。本物の英語が彼
等の発音とかを良くさせているんだと感じた。

5日目

[行動]

托 鉢

ワット・ムーンナー ソンプーアラーム

5人のお坊さんに取材（・コンケル ・セーン ・

サン

コーン ・パイ ・バンディッド）

ワット・ビスン（スイカ寺）

ワット・シェントーン

王宮博物館

滝 4人のお坊さん（・セーン ・サンコーン ・パイ
・バンディッド）

ワット・ムーンナー ソンプーアラーム

ワットシェ-ンでひいたおみくじ

「美人の彼女が出来るが、その代わり家族との関係が悪くなる」と書いてあるらしい……

托 鉢

朝お坊さんたちは自分たちの朝食と昼食をもらうために、5：30に街にでます。一人一人ご飯をもらうための入れ物を持って歩きます。すると街の人が右の写真のように一人づつにご飯を入れていきます。30分ほど歩いてお寺に戻ってくると結構入れ物いっぱいのご飯が入っています。普段はお坊さんはサンダルを履いているけど、托鉢の時は裸足であるきます。

ワット・ビスン（すいか寺）

この寺は塔の形がスイカを半分に切ったように見えるのですいか寺と呼ばれている。このお寺をセーン君とコンケル君に案内してもらった。本堂の中には仏像がたくさんあった。中には日本から来た仏像もあった。そして印象的だったのは、おみこしのようなものだった。これはお祭りの時に使うもので、真中に寺で一番偉いお坊さんが乗る。

王宮博物館

中はものすごく豪華だった。でもベッドルームだけは広いだけで、何もなくてシンプルだった。中には日本から送られてきたものもあったけど、あまり日本っぽいものではなかった。ショーケースを触りながら見ているとパイ君に「触っちゃダメ！！」と言われてしまい、僕たちの方が子どもようでした。

滝にダイブ！！

この取材で一番楽しかったのが、この滝での遊びだった。パイ君、サンコーン君、バンディッド君の3人が水の中にどんどん入っていった。

最初は洋服を着ていたし、少しためらったけど、どんどん入っていく3人を見て羨ましくおもい、靴を脱いで一緒に入っていった。最初はズボンをまくっていたけど濡れてくるし面倒臭いのでズボンをまくのをやめた。3人は水の流れが強い場所にどんどん行くからついて行った。かなり勢いのある場所についた時、ここまで来る途中に何回もコケてすでにビショビショになっていた泉ちゃんが、完全にコケて全身ビショビショになった。そして遂に僕も足をとられてコケた。全身ビショビショ。滝壺の所では足がつかなくなり。2人とも一瞬おぼれそうになった。(僕と泉ちゃん)
最後に5人で滝の一番下まで行き、滝壺にダイブした。この日は全身ビショビショでお寺に帰ったが、本当に楽しかったので「もっと泳ぎたかった」という思いが強く残った。

多分あの3人の目には、僕たちはすごくバカな日本人と映っていたと思う。でも言葉が通じない人同士がここまで楽しく遊べるのはすごいことだと思った。

6日目

[行動]

ワット・ムーンナー ソンブーアラム

偉いお坊さんに取材

仏 教 学 校

学校の先生に取材

ワット・ムーンナーソンブーアラム

サンコーン君の部屋を紹介してもらう

街

ワット・ムーンナー

偉いお坊さんにインタビュー

差し入れのジュースと果物を持ってお寺に行った。すると今日は偉いお坊さんたちがいるということで、その方達にインタビューをした。

ワット・ムーンナーのトップ4

壁にもたれていたお坊さん

一番偉いお坊さん

二番目に偉いお坊さん

体が不自由で杖をついているお坊さん

学校の先生にインタビュー

仏教学校の二番目に偉い先生に許可をもらって一人の先生に話を聞いた。

先生の名前 BOUN YANG

その先生は日本語を勉強していたらしく、「こにちわ」や「さよなら」と言っていた。最後にお互いに自分の名前を書いた紙を渡した。

インタビューの内容

Q 1 : 生徒の数・・・528人

先生の数・・・44人

Q 2 : 普通の学校との違い

普通の学校は先生に謝礼を渡さなくてはいけないため、貧しい人達は行けないが、仏教学校はお坊さんになればだれでも入れるところ。

Q 3 : 時間割・・・月～金 午前・午後

Q 4 : 教育内容・・・普通の学校の勉強+仏教の勉強

Q 5 : 学校は何年間?・・・小学校みたいなものが3年間

中学校みたいなものが3年間

Q 6 : 卒業した人・・・プロのお坊さんになる人や、お坊さんをやめて普通に働いて暮らす人に分かれる。

Q 7 : 他のお寺にも学校はあるか?・・・ルアンプラバンにはここしかない。

街へ！！

セーン君とサンコーン君と一緒に街にインターネットをしに行った。けどインターネットのやり方もあまり知らないし、英語も読めないなので、僕たちは訳も分からずやっていた。そんな中セーン君は週に2～3回はインターネットをしにくるのだと言う。家にコンピューターがある僕より多い。そして僕もドミニクさんにメルアドをつくってもらい、「Hello, How are you? 」と打ってセーン君に送った。けどセーン君はそれどころではなかったらしく、最後まで見てくれなかった。多分次に行った時くらい気付いているだろう。

7日目

[行動]

托 鉢 ワット・ムーンナーのお坊さんと一緒に歩く

ワット・ムーンナー セーン君の部屋を紹介してもらう

文 房 具 屋 若いお坊さんたちに辞書をプレゼント

仏 教 学 校 先生に取材

お坊さんの1日

4 : 0 0	起床
5 : 1 0	托鉢
6 : 0 0 ~ 6 : 3 0	朝食
8 : 0 0	学校
1 1 : 0 0	昼食 (それぞれのお寺で)
1 3 : 0 0 ~ 1 6 : 3 0	学校
1 9 : 0 0	お祈り

僕たちがお坊さんのためにできる事

○ 募金

お坊さんにとって一番足りないものが、学校で使うノートやペンなどの文房具類です。学校の全校生徒が528人いるので、とてもその分の文房具一式がそろいません。そしてお坊さんたちが授業をしているのはお寺のお坊さんが住んでいた所を改装したようなものなので設備が十分ではありません。だから、ちゃんとした学校を建てたいと先生は言っていました。その他にも「世界で通用する人間を育てるためにコンピューターが欲しい」「一年中暑いラオスでは生徒たちの集中力がなくなって来るので、クーラーが欲しい」などがありました。

○ 学校の先生としてお坊さんに勉強を教える

仏教学校では、物と同じくらいに先生の数が足りていないので、勉強を教えにきてくれる先生がもっと必要だと言っていました。

○ この他にも色々なこととお坊さんやラオスの人達の役に立つことができます。どんな小さな事でも一個一個やってみてください。

取材を終えて

このラオス取材で感じた事や気付いたことは数え切れないくらいたくさんあった。まず最初に、ラオスの人たちはすごく温かかったこと。会う人会う人本当は全く知らなくて他人のはずなのに、ラオス人は片言の日本語で「こんにちは」などとすぐ声をかけてくれる。今の日本では親とさえ話さない人もいる。ましてや他人と話す人なんかほとんどいない。だからそんなたった一言でも心がなんかすごく温かくなった。

次にラオスのお坊さんは本当に勉強熱心な事。その中でも一番好きなセーン君は「自分の知らない事を知るのはすごく楽しい。だからもっと勉強したくなる」と言っていた。最初はこんなことを言うお坊さんたちのことが理解できなかった。それに僕はずっと英語が好きでなかった。「どうせ日本にいれば必要ないじゃん」とずっと思っていた。でもラオスに行ったら色々な人が英語で話しているのに自分はわからないから会話に入れない。そんな時に、英語がはなせなければつまらないと思った。これからはもし外国人に会った時に、英語を話せないという理由だけで、その人と仲良くなるチ

チャンス逃したらもったいないと感じた。

次にそんな勉強熱心なお坊さんたちも日本の子どもとそんなに変わらない事。ラオスのお坊さんたちはとっても無邪気で特に12歳以下の子は本当にすごいです。水の中に入る時も全くためらわずバシャバシャ入っていきます。それに笑っている顔なんか、日本の子ども達より明るいんです。そしてこのラオスに来て最も感じた事はやっぱり「友情に国境は無い」ということです。滝であそんでいた人は合計6人いました。けどその人たちは国籍も歳も名前もみんなバラバラです。話している言葉もちがひ、相手が何を言っているのかも分かりません。でも、みんな滝であそんでいると楽しいんです。そして言葉も通じないのに相手が楽しそうにしていると嬉しいんです。すごく不思議に思ったけど、多分これが友情っていうもんだと思う。確信はできないけど心のこもってない会話が通じるより、相手が笑ったらこっちも笑い返すみたいな簡単なことの方が大事なんだと感じた。

だから、男でも女でも、日本人でもラオス人でもフランス人でも、中学生でも赤ちゃんでも100歳のおじいちゃんでも黒人でも白人でも、きっと友情は生まれる。そうするためには友達になろうという努力が一番大事だ！！

2004年 夏休み友情のレポーター 香山 和志